

一般財団法人 島根県高等学校野球連盟

これまでのあゆみ

ここ25年の加盟校の活躍を振り返ってみると、硬式部では、全国高等学校野球選手権大会において本県代表校は、第71回～79回まで9年連続で初戦敗退という厳しい状況にあったが、これを打ち破ったのが浜田であった。

第80回大会（平成10年）は、松坂大輔投手を擁する横浜（東神奈川）が全国制覇を果たすなど、後世に語り継がれる大会となったが、浜田も和田毅投手を中心に、2回戦で新発田農業（新潟）に快勝すると、帝京（東京都）との3回戦では、同点本塁打を浴びた直後に貴重な追加点をあげて勝利し、ベスト8に進出した。準々決勝の豊田大谷（東愛知）戦でも、浜田は最終的に2点を追いつく驚異的な粘りを見せた。

第85回大会（平成15年）は、2年生エースのダルビッシュ有投手を擁した東北（宮城）が準優勝するなど話題の多い大会であったが、江の川の快進撃も光った。2回戦で中越（新潟）に完封で勝利すると、続く3回戦の沖縄尚学（沖縄）戦でも、木野下優投手が2試合連続完封勝利でベスト8に進出。さらに、準々決勝の聖望学園（埼玉）戦でも劇的なサヨナラ勝利をおさめ、江の川はベスト4に進出。これが、現在でも本県代表校の最高成績となっている。

第91回大会（平成21年）は、決勝戦で6点を追う日本文理（新潟）が9回2死から驚異的な追い上げで1点差まで迫ったことでも話題となったが、立正大浜南も甲子園初出場とは思えない素晴らしい野球を展開した。2回戦の華陵（山口）戦で、崎田聖羅投手の好投と後藤静磨選手の劇的なサヨナラ本塁打で勝利をつかむと、3回戦の東農大二（群馬）戦にも勝利し、甲子園初出場でベスト8進出という偉業を達成した。

第103回大会（令和3年）は、コロナ禍により2年ぶりの大会開催となった。石見智翠館は、2回戦の弘前学院聖愛（青森）戦を山崎琢磨投手の好投と宮本昶希選手の貴重な本塁打で制すと、続く3回戦の日大山形（山形）戦でも、今泉秀悟選手の劇的なサヨナラ安打で勝利をつかみ、見事ベスト8に進出した。

軟式部は、浜田の全国高等学校軟式野球選手権大会での活躍が素晴らしい。

第44回大会（平成11年）では、1回戦で北海道工業（北海道）、準々決勝で久留米商業（福岡）、準決勝で柳井（山口）を次々と撃破し、決勝に進出。見事準優勝に輝いた。

第49回大会（平成16年）では、1回戦の浜松商業（静岡）と2日間にわたって繰り広げられた延長21回という壮絶な試合をサヨナラ勝利で制すと、続く準々決勝でも創価（東京）に競り勝ち、ベスト4進出を果たした。

さらに、第66回大会（令和3年）でも、1回戦の横浜商業（神奈川）、続く準々決勝では松商学園（長野）に勝利し、ベスト4進出を果たしている。

現在の状況

現在の加盟校数は硬式部39校、軟式部3校である。本連盟内に「強化委員会」、「普及委員会」、「軟式専門部」、「審判部」を設置し、大会運営に加えて、さまざまな行事を企画、運営している。近年のスポーツの多様化や少子化等の影響により、令和5年度島根県高等学校秋季野球大会（硬式）では加盟39校のうち、部員が9人に満たず連合チームで参加した学校が3校、選手登録数が上限20人に満たないチームが全体の半数以上となるなど「部員不足」が深刻な状況である。さらに、審判員の「高齢化」や「人材不足」にも直面しており、2030年に本県で開催予定の島根かみあり国スポにおいては、現在の審判員の人数が維持された場合でも、10人以上の審判員が不足する状況である。

これから

強化委員会では最終目標「島根から日本一のチームを」、中間目標「秋季中国大会決勝進出」を掲げ、中高連携野球実技講習会、フレッシュトーナメント、合同強化練習会、指導者研修会等の行事を実施し、加盟校の強化を図っている。

また、少子化や野球人気の低迷、気軽に野球のできる環境の減少、野球に関わる保護者の経済的負担等のさまざまな要因により、本県の学童野球・中学野球・高校野球において、チームの統廃合や部員不足を引き起こしている。

そこで、野球未経験の幼児に野球の楽しさを知ってもらい、親子で気軽に野球を楽しんでもらう機会を設けることで、野球への興味、関心を醸成することを目的に、普及委員会では「出雲子ども野球フェスタ」、「いわみ子ども野球フェスタ」を実施している。これらを通じて、野球人口が増加し、本県が「野球普及活動先進県」となることを期待している。

さらに、審判部では、将来審判員として活躍する人材の育成を目的に「野球部員対象審判講習会」を実施し、全県をあげて審判員不足の解決にも力を注いでいる。



出雲子ども野球フェスタ